

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 629 号] 2014 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 629

November 2014

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

2014 年から 2015 年への課題

## 新しい半世紀へ、ファンドの継続と充実

大村 恵美子 (主宰者)

これまでの月報で迎ってきましたとおり、創立 50 周年記念の諸行事は今年で完結し、4 大作品連続演奏会も、しり上がりの思いがけない好評をいただいて、無事達成することができました。計画の中で残るのは、創立 50 年誌の編纂ですが、これも秋の訪れとともに急ピッチで実現の運びとなり、年内には皆様にお目見えすることになりそうです。

「バッハのクリスマス音楽の花束」を標題とする今回の定期演奏会(第 111 回、12 月 13 日、府中の森芸術劇場)の準備に励んでいる間に、来夏の 3.11 被災地の方々との合同演奏会も本決まりとなり、心づよい地元の皆様の協力が、今から伝えられております(第 112 回定期演奏会、2015 年 8 月 22 日、福島県・南相馬市民文化会館。右掲概要参照)。当日の同舞台上、混声合唱「大切なふるさと」「花は咲く」などを上演して下さる予定の、複数の現地合唱団有志の方々です。90 名を越えたそうです。そのお一人ずつがそれぞれ数名のお仲間をお連れくださることでしょう。“合唱王国”そうま地方の多くの市民の皆様が、バッハの教会カンタータとモテットの日本語の響きを心待ちにし、合同演奏の実現を楽しみにしてくださっているのです。

さて、これまでの一連の活動を支えるべく、2011 年始めに企画されました創立 50 周年記念ファンドも、いよいよこの年末(2014 年 12 月 31 日)を期限とする終了がせまってきました。これまでに 200 名近くの賛同の方々を迎えて、金額は 300 万円を上回っておりますが、あと 3 カ月の期間内に、さらに私たちの努力を重ねて、目標額(500 万円)の達成ができることを祈っています。主宰者である私が、現在考えますに、この大きなご支援をいただかなければ、50 周年という節目に、これだけの実績を上げられなかったのは確かなことで、私たちはほんとうに幸いだったと、つくづく感謝しています。皆さまお一人ひとりのご貢献を、私は今後すえながく記憶してゆくことでしょう。

ここで、この 50 年間の、絶えず赤字に追いかけて、危うい橋を渡りつづけてきた歴史を思い返すにつけ、先行き不透明なわが国の経済事情のなかで、新たな半世紀への門出に面するこの合唱団が、荒波にあお

られるようなことを避けるには、やはりこれからも備えとして、幾ばくかの資金・予備金をつねに保有しておかねばならないのは、当然の心掛けでありましょう。これまでの、未経験そのものの、学生の身分でいきなり発足した私も、半世紀を経た今、実社会の尊い体験を身に積んでこられた団員・後援会員・聴衆の方々のお知恵にあずかって、経営的にも堅実な組織として演奏活動や楽譜出版(ブライトコプフ日本語版は、11 月に 3 曲の新刊を加え、既刊 67 曲となりました)などの普及活動に邁進しなければならぬと存じます。

そこで、創立 50 周年記念ファンドは、公表どおり、本年末で終わらせて、目標額に達しなかった場合でも、感謝の内に打ち止めることにいたします。そして 2015

### 東京バッハ合唱団 3.11 被災地訪問演奏

＜福島県・南相馬公演＞

—第 112 回定期演奏会—

＜日時・会場＞

2015 年 8 月 22 日(土)、開演 13:30  
南相馬市民文化会館「ゆめはっと」大ホール

＜プログラム＞

- ・カンタータ第 92 番《わが心 思い 神にゆだねたり》
- ・(賛助出演)「花は咲く」「大切なふるさと」「故郷」
- ・カンタータ第 81 番《主イエス眠り いかによすべきわが望み》
- ・モテット《イエス よろこび》

＜出演＞

[ソプラノ] 光野孝子、[アルト] 佐々木まり子  
[テノール] 鏡 貴之、[バス] 山本悠尋  
[室内楽] 東京カンタータ室内管弦楽団  
[オルガン] 石川優歌  
[賛助出演] そうま地方合唱を楽しむ会合唱団  
[合唱] 東京バッハ合唱団  
[指揮/訳詞] 大村恵美子

＜入場料＞

前売り 1000 円予定(発売時期等は続報)

＜合唱ツアー参加者募集＞

南相馬公演では、上記カンタータとモテットを日本語で歌います。魂そのものである母語によって、聴き手のこころの奥深くへ、バッハの生きたメッセージをお伝えしましょう。みなさまのご参加とご同行をお待ちします(1泊2日)。練習開始は 2015 年 1 月より。詳細はお問い合わせください。

年1月からは、後援会組織との兼ね合いなど、サポートとファンレイジングの仕組みを整理しながら、こちらはゆるい受け皿として、合唱団の新しい歩みをお支えくださる方々からの、自由なご寄付の基金として積み立ててゆくようにしたいと考えます。

「東京バッハ合唱団・後援会」(後援会員)は、合唱団の発足とほぼ同時に、「礼拝と音楽」誌の先輩編集者だった由木康(牧師)、田中忠雄(洋画家)の両氏、芸大時代の恩師辻荘一氏と服部幸三氏、さらに洋画家の向井潤吉氏らの錚々たる顔ぶれを发起人としてスタートして、合唱団ともに半世紀を歩きました。現在の後援会員は、北海道から沖縄にいたるまでの110名ほどが、毎月発行の月報と年2回ほどの公演、7月の創立記念祝会、12月のクリスマス懇親会などを通じて親睦を重ねながら、団活動を全面的に支えてくださっています。

1 口年間：12,000 円(従来どおり)での後援会員の特典は以下のとおり(①定期演奏会へのご招待、②毎月月報の贈呈、③団発行の楽譜・CD等は団員価格、④諸行事へのご案内・優待)ですが、これに「⑤通常の練習への参加の特典」を新設します。

遠隔の地にお住いの数人の後援会員(山形県東根市、北海道釧路市、名古屋市など)がすでに実践されています。東京へのご用事のおりに練習場にお顔をお出しくださったり、本番前に集中して練習参加してステージに加わったりと、楽しんでいらしゃいます。後援会員の方々と団員との、目的を一つにしたより緊密なつながりを作り上げたいと願います。

これに対し、明年1月より新しく始める「東京バッハ合唱団・支援基金」(サポーター)は、どんな機会にでも、ご自由な金額(5,000円以上)を、将来の活動資金として投じてくださることを、お願いしたいのです。後援会員のように、定期演奏会ご招待の特典はおつけできませんが、月報を10か月間お送りさせていただきます。記念ファンド同様、お名前の公表はいたしません。なお、これまでの記念ファンドでメンバーとなられた方には、本年12月号の月報まで、印刷物等の発送を終了させていただきますので、ご了承くださいませようお知らせ申し上げます。

まずは目下、50周年記念ファンドの目標額達成が緊急・緊要の課題です。ご協力を重ねてお願い申し上げます。10月から12月までの、記念ファンドへのご寄付の方には、明年以降開設の支援基金サポーターとして、ご寄付から10か月間、ひきつづき月報を贈呈いたします。

後援会、記念ファンドいずれも、ご加入・ご寄付は、原則として、郵便局の振替口座をご利用いただけます。もよりの郵便局窓口にて、振替用紙(払込取

扱票)の通信欄に、「後援会」ないしは「記念ファンド」(明年以降は「支援基金」)とご明記いただき、住所・氏名・連絡先電話番号等をお書き込みの上、所定の金額をお振込みください。受領後直ちに領収証をご返信し、後援会員あるいはサポーターとして遇らせていただくこととなります。

「後援会」入会/「記念ファンド」寄付口座

- ・口座記号：00190-3
- ・口座番号：47604(右詰で記入)
- ・加入者名：東京バッハ合唱団

そして、なによりも、目前に迫りました「バッハのクリスマス音楽の花束」第111回定期演奏会(12月13日(土)19時開演、府中の森芸術劇場)への、ふるってのご来聴を、こころよりお待ち申し上げます。



### 3・11 被災地訪問演奏会の新年に臨んで — 新刊紹介を兼ねた個人的願望 —

大村 恵美子(主宰者)

東日本大震災を思う私の心を鼓舞してくれるような本を日々探していて、この新刊に飛びつきましたが、予想にたがわず豊富な内容(本文406ページ)で、3.11の体験からほぼしり出た著者の自省と希望は、内外の多数の著作の紹介や、現在の立場への無数の課題提起など、その中からただ著者の訴えようとする荒筋の把握と再現だけに限るとしても、短くまとめることなどとても出来ませんので、私は、自分自身が直接励まされる内容だけをとり出して、原文引用に近い形で並べてゆくことにとどめました。

全体は、近代の産業革命から福島原発事故に至るまでのなりゆきを、「第4次」の産業革命までに区切って説いている部分を辿ってみました。今後の展望のところで、著者がしきりと、相手からのテイク(take)に対し、自由なギヴ(give、贈与)を示唆しているのですが、元来、自分の働きが他者から喜ばれるのを至上の幸福と感じる、プレゼント好きの私には、大いにありがたい読後感となりました。「そんな甘いもんじゃない」という方々のしかめ顔もちらちら浮かびますが、被災地訪問には、ぜひともこの本の明かるいおめでたさが、真実に近づける体験として加わられますよう、私は祈っています。

\* \* \*

ハイデッカー紹介(『技術への問い』訳本、平凡社、2013年)。ほかの動植物は自然との関係において自分に「可能なもの」の圏域に安らっているが、人間ばか

りは、そこを踏みだし、無限に不可能なものを欲する。……芸術は、自然に対し謙虚に向きあいつつそこから本領を受ける〔不可能なものへの働きかけかたの二つの仕方のうち〕後者の仕方を代表する。その一方、技術は、自然に「起立」を命じて自然を対象化する前者の代表である。

竹田青嗣『近代哲学再考』徑書房、2004年。「自由の意識」は、「目的」と「力能（できる）」の関係の中で生じる可能性と内的な創造性の感覚である。

吉本隆明紹介。人間と自然の関係は、相互的で、人間は自然を人間化し、かつそのことの反作用によって、その活動を通じて自分自身が自然の一環へと組み入れられる。——フィードバックは、吉本ふうにいえば人間と自然の対一関係における相互作用の働き（作用と反作用）なのである。

著者の意見として、〔現在の〕私たちに求められていることは、この限界超過生存〔限界を越えてなお生き続けていること〕が、地球の有限性という不可逆的な変容からやってきていることを、しっかりと受けとめることである。〔大村：人類の文化は、良かれ悪しかれ、「バベルの塔」現象に集約されるというのが、もの心ついて以来の私の信念となっています。〕

#### ■産業革命の推移

第1次産業革命（18世紀末 - 19世紀初頭）：蒸気機関と紡績機械の発明に始まり、高度成長に向かう。

第2次産業革命（19世紀末 - 20世紀初頭）：第一次世界大戦前、独占資本主義の成立。石油と製鉄。

第3次産業革命（20世紀中葉）：技術の最終的な爛熟期。技術変革が始まる。原子力、宇宙航空科学。第二次世界大戦の中核は、原子エネルギー、ジェット機、ミサイル、宇宙科学、オペレーションズ・リサーチなど、軍事的な意味あいを持つ科学技術によって占められている。

1958年 - 1975年：技術革新の停滞、産業規模の大型化・高速化、産業事故の巨大化・過酷化。

1979年：スリーマイル島原発事故。1980年以降「リスク学」出現。

1985年：つくば科学万博から、劇的に小型化、高度化、高速化の方向に転ずる。モノ（物品）からコト（情報）転換もこれに平行。

1986年：チェルノブイリ原発事故。

1990年以降：コンピュータ通信情報革命が世界を席卷。

2011年：福島第1原発事故。

#### ■人口統計と産業革命の推移との重なり

D. リースマン『孤独な群衆』（1950年）（訳本、みすず書房・1964年）による社会の発展モデル。

第1段階：たくさん出生、たくさん死亡。高度成長潜在的な社会。大衆の同調性の基準は「伝統指向」。第

1次産業（農業・狩猟・鉱業）。

第2段階：たくさん出生、あまり死亡せず。過渡的人口成長期の社会。典型的成員が幼児期にセットされる「内的指向」。第2次産業（工業）。

第3段階：あまり出生せず、あまり死亡せず。初期的人口減退期の社会。他人の期待と好みに敏感、同調「他人指向」。商業・コミュニケーション・サービス。次々と限界に到達してゆく。

1950年：「ゆたかな社会」→成長の限界。

1962年：環境の限界。1972年：資源の限界。

#### ■第3次産業革命の特徴

軍事技術出自の原子力・宇宙技術は、民生部門への寄与が少ない。極端な秘密主義の管理、隔離技術に徹する。民間人と軍人両者の対等で自由な協同作業がなければ発展しない。日・独は失敗（第二次大戦中の防空網の構築など）。

#### ■第4次産業革命の特徴

第3次の特徴（小資源、小廃棄、コト中心の情報化社会、双方向性の情報化社会への転成など）から、自由で気ままな、統率されない個人、非エスタブリッシュな若者の創発性を推進力とした通信情報革命によって代わられる。そこに技術の原理の改変に相当する新しい要素がひそむ。産業資本制システムから牧歌的社会へと撤退することでは果たせない。新しい産業の原理と新しい利潤＝関心＝興味（interest）の原理が生まれなければならない。

モノからくる栄養よりも言葉からくる楽しさが、あるとき以降、人に訴えるようになった。——私たち人間の側の変容の問題が顔を見せている。市場もまた、内的な限界をもつ（資本投下の利潤率が長期間ほとんどゼロ金利という現状は、すでに資本主義が機能していないという兆候）。資本制システムが終焉を迎えようとしている以上、これが世界の混乱へと進まないよう、新しい考え方に立って、新しいシステムを構築しなければならない。

現在の社会の動きが教えることは、「役立つもの」よりも「すてきなもの」、「大きなもの」よりも「小さなもの」、「重厚なもの」よりも「軽微なもの」に私たちの欲求と関心が向かい、その方向の進展により高度な価値と達成があると、無意識のうちに感じられるようになることである。

技術の革新が限界まで達すると、それをその先に進ませるのは、技術ではなく人間の側の改変なのである。——「必要」を捨ててまでも「楽しさ」をとるともいべき、生きる姿勢がないと、こういうことは起こらない〔ソニーのウォークマン開発の成功例をひいて〕。——これに呼応する市場の反応——受動体の「脳」の変容——が生まれてはじめて、これが新しい変化に結びつく。技術はこうして人間に働きかけ、またその人

間の変化から啓発を受けつつ、自ら革新をとげ、新しい人間を作りだしていく。

#### ■ 今後への示唆

・ 軍事目的（市場の競争原理から隔離され、産業競争力を失う）とどれだけ切り離せるかが最大の課題。

・ 3.11 の原発事故と、その後世界で起こっているのは、日本では稼働中の原発は 50 基中 2 基ないしゼロ（2013 年 5 月～2014 年 5 月）。アメリカはシェールガスの商業化にともない、原発の閉鎖や操業縮小が見られはじめている。国家が巨額をこれに投じるということは、今後、考えにくい。

・ 民間の非エスタブリッシュ層から生まれた広義の技術革新をもととした社会変動が、あっという間に世界を席卷する。——最初は新しい人間が、新しい技術革新を実現、展開したのだが、今度はそれが、人間を新しくするということが起こっている。

1972 年の資源危機をへて現れてくる、「成長は地球を破滅させる。もうこれ以上はいけない。やめなくては」という限界からの警告とは、微妙に、しかも、はっきりと違う。前者にあり、後者にもう消えているのが「笑い」なのである。成長がゆきつくところまでゆきついたこと、それ以外に、通信情報革命を可能にした自由な気風と笑いの出自は、求められない。

インターネットに本来的に備わっているメディアの本質は、ストック (stock) しないこと、フロー (flow) することを喜ぶことであり、利潤獲得ではなく贈与に向かう関係創造の力である。

幸せや人間的成長を得ることには楽観的になれるが、収入を得たり、債務を返済したりすることには悲観的にならざるをえなくなった [それだからといって逃げたくはない]。

T. コーエンによれば、インターネットの特徴、そして問題点は「多くの商品が無料で提供されていること」である。……原子エネルギーの開発とは別の意味で、やはり民間の経済成長からそれていく空洞化の傾向を強くもっている (T. コーエン『大停滞』(NTT出版、2011 年))。でもこのことは否定的にだけ、みられるべきことなのだろうか。長期的にみれば、むしろそこに、より深い、インターネットという技術革新の可能性は、あるのかもしれない。——第 2 世代の革命は、インターネットを手がかりに、新しい公共性の創設という未曾有の方向を示すのである。

私的領域への浸透能力、国境の無化、権力との衝突、さらにそれらすべてに通底するものとしての贈与という動機の登場——こうしたものが、当初想定されることのなかった、通信情報革命のただなかから生まれてきた未知の「質」だ。

米国の遺伝子医療の開発が従来通りの利潤追求型を示しているのに対し、日本の開発がそれへのオルタナティブ (対抗) の選択肢の確保をめざしていると推進

者によって語られているとのことである (iPS 細胞の場合)。彼らは、再生医療技術が特許等により利潤を生む一方、高額化して患者に不利が及ぶことを極力阻止することを、その研究開発の動機としている。彼らを動かしているものが、何より贈与のかたちをとっているらしいこと、その一点で、彼らの流儀も第 2 世代の公共的な姿勢に通じるものである。

いまや「宇宙」(マクロコスモス) から頭と心と体からなる広義の「人体」(ミクロコスモス) へと移ってきているという共通点がある。

私 [著者=加藤典洋] はこれまで、人間がどのように技術を変えるのかと考えてきたのだが、それは、同時に人間を変えるものでなければ、いまやその先には進まないものだった。そこにも、自然的な過程がひそんでいる。それは、技術から人間への反作用をも含んでいるのである。

#### ■ 著者の最終ページ、具体的結論、提案

日本の戦後の問題も、この有限性の生の条件のもとで、考え直されなくてはならないのだろうと、著者は考えている。アジアとの関係では、何度でも、相手が了解するまで、なすべき謝罪をしっかりと行い、関係を築き直すことが重要である。アメリカとの関係では、かつての原子爆弾投下が最後の問題となるが、抗議すべきはしっかりと抗議し、関係を再構築したうえで、さらに、赦すべきはしっかりと赦し、その関係を先に進めることが必要となる。……そこでも大切なことは、負債はしっかりと返済すること、相手に債務があれば、返済をしっかりと要求すること。その上でやるべきことがなされた後は、新しい関係の創造に向けて、一方的に、贈与することである。

関係の修復、信頼の創造。その根源に負債の支払いと贈与の用意がある。

\* \* \*

この新刊は、読んだばかりなので、すぐには公平な気持ちを取り戻すことはできませんが、損得の判断や、好き嫌いの感情でエゴを押しとおす段階から、どのようにすれば早く自分を取り戻すことができるか。それには、他人の苦しみと喜びから自分のなすべきことを感じとる、そんな環境づくりを、<宗教>という、垢にまみれた恐ろしい枠を抜きにして、身につけることではないでしょうか。

音楽の達人の先生から昔教え込まれたのですが、「自分の声に得意がらずに、ソプラノ一般、バス一般……というものに溶け込もうとする」、これが肩ひじ張らず生きてゆける極意だと、私は信じており、この著者にもそんな大らかさが感じられて、大いに楽な気持ちになれました。地球は滅びる、人類は消える、etc.、短く限りある自分の人生で、納得できないことを気に病んで一日々々をおろそかにするよりも、自他ともに楽しいものごとに、一日を満たしてゆきましょう。